

特集 「境界線の学校史」の射程

本特集「『境界線の学校史』の射程」は、昨年刊行された木村元編『境界線の学校史——戦後日本の学校化社会の周縁と周辺』（東京大学出版会、2020年）に端を発する。本書は、堅固で自律的にみえる日本の学校史が実は制度的に不安定さを孕んでおり、外部社会との緊張関係の中で常に自己規定を迫られてきたことを論じている。学力保障の対象としての「国民」像や、その内容としての「普通教育」概念をどのように定めてきたのか、そしてそこから何を排除してきたのか——これらのことが、夜間中学や定通教育、朝鮮学校など境界線上にある学校群に注目することで明らかにされている（第Ⅰ部 教育を保障する境界線——義務教育・学校教育・公教育）。また、学校化社会の進行の過程で、教育課程や学校文化を通して形成される学校的な身体性についても、学校内部の境界線という視座から論じられている（第Ⅱ部 どんな教育を保障するか——普通教育の境界変動）。このように、本書の魅力は、学校システムと教育内容のふたつのレベルにおいて学校史における揺らぎの諸相を描いている点にあるといえよう。

本特集は、本書執筆者による座談会、書評、書評リプライ、また本書と問題意識を共有する2本の論文の掲載を通して、学校史への新たなアプローチである「境界線の学校史」という試みの到達点と課題、そしてそのさらなる可能性を明らかにしようとするものである。

座談会では、戦後教育における学力保障の問題をどう把握するか、社会史の視点から戦後教育をどのように時期区分するか、現代における学校の揺らぎをどう捉えるか、さらには「境界線の学校史」の視角から浮かび上がる現代的課題は何か、などの多様な論点をめぐって議論がなされている。また、書評及び書評リプライでは、歴史学の立場から教育に関心を寄せてきた大門正克氏（評者）による論点提起によって、「教育の経験」をどう捉えどう描くのか、などをめぐる重要な対話が織りなされている。そして続いて、教育における〈包摂と排除〉問題を問い続けてきた倉石一郎氏、またとりわけ北部九州産炭地を対象とする社会教育史研究に従事してきた農中至氏のそれぞれの立場から、「境界線の学校史」という問題提起の受け止めとそのさらなる可能性をめぐって議論が展開されている。これら一連の議論を通じて、いかなる「境界線の学校史」の射程がひらかれているか、読者各位にもぜひ吟味していただきたい。

また、本特集を通じて明らかになることの一つは、「境界線の学校史」のアプローチによって描きうる対象の多様性であるだろう。それゆえ、「境界線の学校史」という試みを読者各位の関心に引き寄せながら検討してみることも十分可能であると思われる。公教育の揺らぎが指摘されて久しい昨今であるが、本特集がそれを再考していく上での新たな視角を提示するものになったならば幸いである。